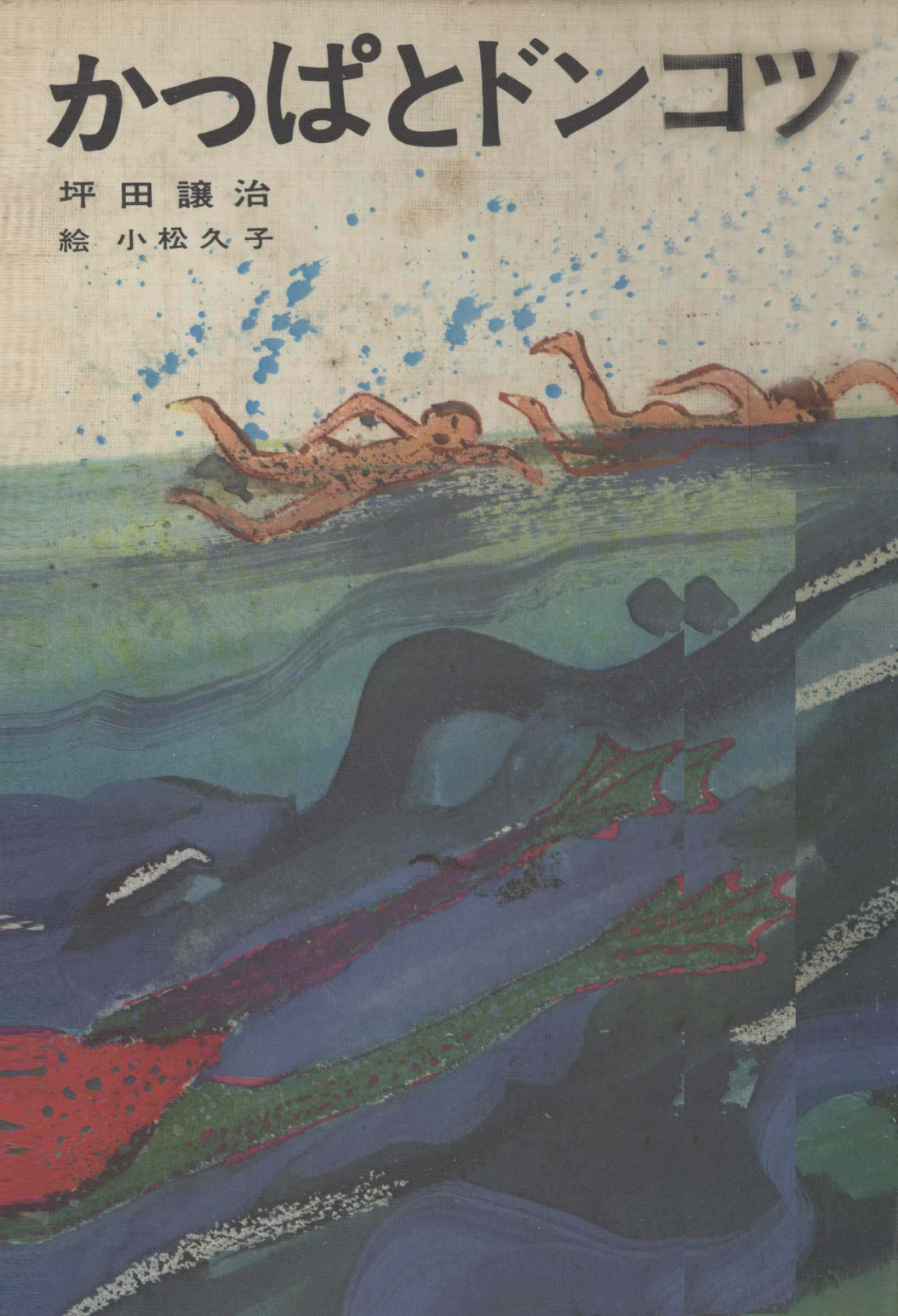
かっぱとドンコツ

坪田譲治
絵 小松久子



913

坪田譲治

かっぱとドンコツ

講談社　1973

214p　21.5cm

（児童文学創作シリーズ）

つぼた　じょうじ

かっぱとドンコツ

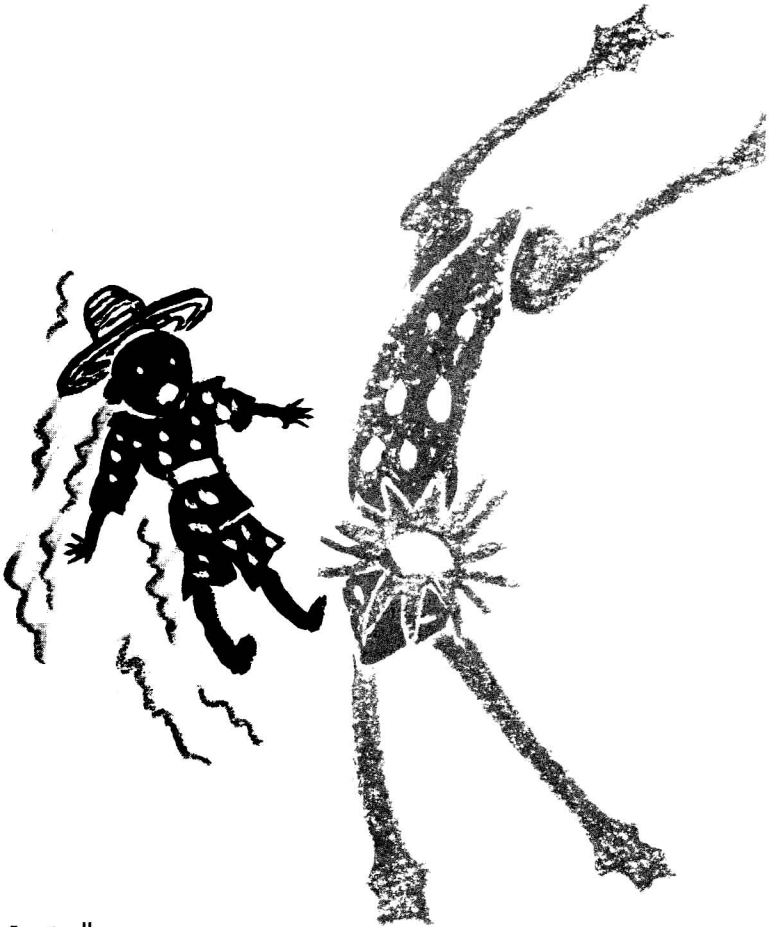
昭和48年8月8日　第1刷発行

著　者　坪田譲治（つぼたじょうじ）
発行者　野間省一
発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽2-12-21　郵便番号112
電話　東京 03(945)1111（大代表）
振替　東京 3930
製　版　株式会社 まゆら美研
印刷所　双美印刷株式会社
製本所　黒柳製本株式会社
定　価　600 円

© 坪田譲治　1973　Printed in Japan

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

8093 - 188979 - 2253(0)　（児1）



かっぱとドンゴツ

坪田譲治・作
小松久子・絵

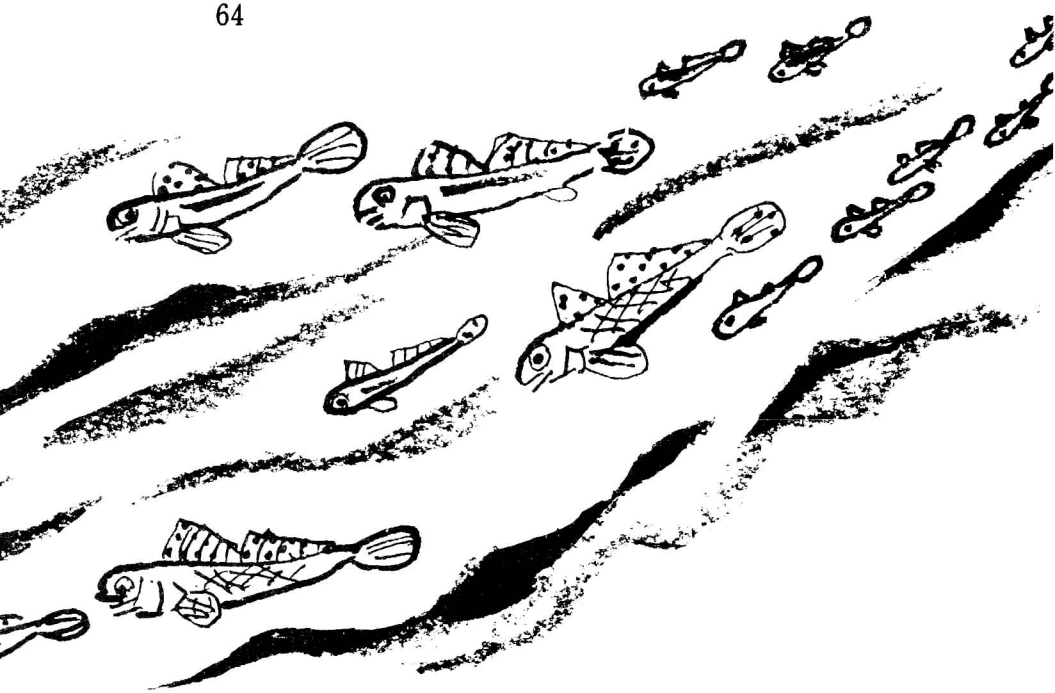
講談社

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

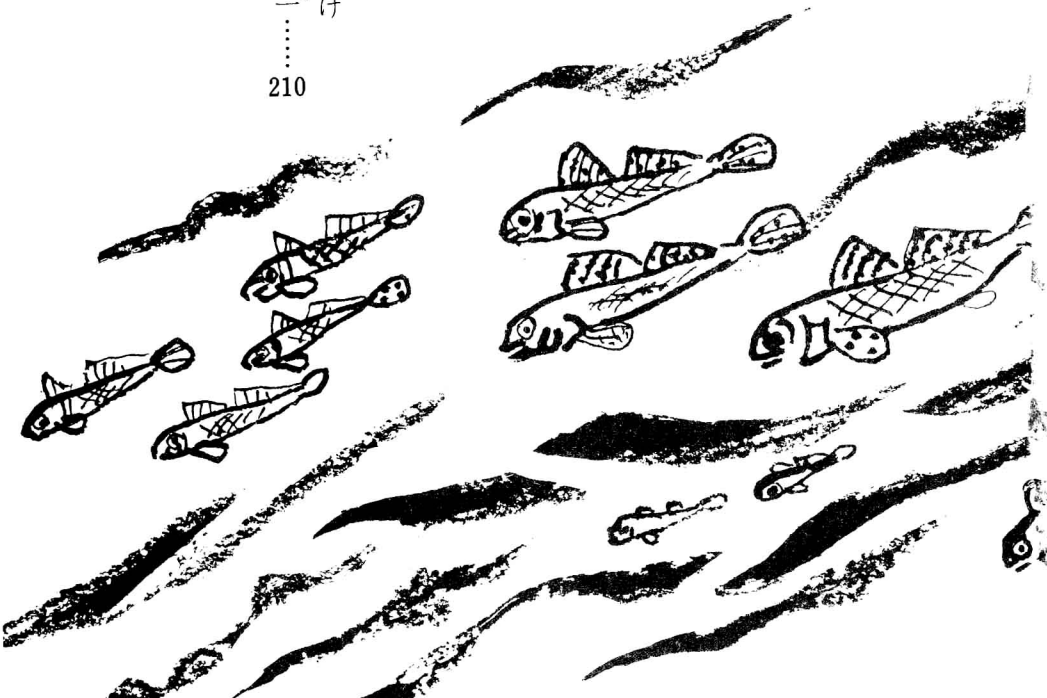
かっぱとドンコツ

もくじ

生まれたときもう歯がはえていたという話……6
エヘンの橋……11
明治の夜……18
子ども大将……30
病気の話……45
ドンコツの最期……54
学校に住んでいたいたち……64
いり豆……74
ひげ屋敷……83



大川の泳ぎ場……89
かっぱに出会った話……97
おとうさんの話……106
妙林寺山……124
このはがに……131
川干しと胴じり網……149
人見のおばあさん……165
子ども十二か月……179
「かっぱとドンコツ」の生まれたわけ
——与田準一……210



生まれたときもう歯がはえていたという話

どうも、これは、おばさんから聞いた話のように思うのですが、うそか、まことかわかりません。とにかく、わたしは生まれて三日たったとき、口の中を見たら、歯がはえていたというのです。

「ありゃ、この子はもう歯がはえとらあ。」

おばさんはびっくりしたそうです。そこで、お産婆さんや手つだいの人や、おばさんの姉や妹や、何人もが、

「どれ、どれ。」

めずらしがって、つぎつぎとのぞいたそうです。しかしなにぶん生まれたばかりの赤んぼうのことですから、そんなに口を大きくあけて見るわけにはいきません。また、指をつっこんで、その歯

というのにさわってみることもできません。それで、

「歯がはえとるなんて、そんなことはありませんよ。あんたの見ちがいだよ。」

そういう別のおばさんもあったそうです。しかし、わたしの歯を最初に見た、そのおばさんは、そのときまだ十四、五の娘だったのですが、

「見た。わたしはたしかに、ジョウジの歯を見た。さっき、大きなあくびをしたとき、口の中の奥のほうに、白い小さな歯がちゃんと、三本はえていた。」

こういってききません。おばさんはいま、もう九十二か三になりますが、耳は聞こえないけれど、生来のがんこやで、いいだしたらかぎり、あとへひきません。それ以来、ジョウは生まれたとき、奥歯が三本はえていたと、いまにいいはっているしまつです。

ところで、わたしは子どものころ、そんなことを、このおばさんから聞いたもので、そのころまだぴんぴんしていたおかあさんに、問うてみました。

「おかあさん、わたしが生まれたとき、奥歯が三本はえていたというの、ほんとう？　うそ？　おばさんは見たというんだけど――。」

すると、母はいいました。

「それがねえ、そのとき、おかあさんはお産のあとでしょう。すっかりくたびれて、元気がなかった。だから、そんなことあるはずがないと思ったけれど、たしかめもせずに、ぐうぐうねむっていたんだよ。一週間もたったかねえ。おばさんの話を思い出して、あんたにお乳をのますとき、口の中へ指を入れて、歯ぐきのへんをようくさぐってみたんだよ。しかし歯らしいものは一つもさわらなかった。だからね、あのおばさん以外、あんたに歯がはえていたなんて、思ってる人は一人もありませんよ。まったく、そんなことがあるはずがないもの。」

そこでわたしは、もう一度、おかあさんに聞いてみました。

「だけどおかあさん、おばさんはなぜ、ぼくに歯がはえてたっていうんだろう。ぼくは、ねこやねずみじゃなし、生まれるともう、ぎざぎざの歯があったなんて、はずかしくて大きらいだ。」

すると、母はいいました。

「それはねえ、おばさんは、あんたをひいきにしていってるんだよ。中国にむかしむかし、老子っていう、えらい人があったそうだよ。その人が、いい伝えによると、生まれたときもう歯がはえていたそうなんだよ。そのうえ、この人は、よっぽど長くおかあさんのおなかの中にいたとみえ、生まれるとすぐ、おとなのようにものをいったというんだよ。それから、弘法大師だの、太閤秀吉だ

のというえらい人も、生まれたときもう、ものがいえたとか、歯がはえていたとかいうんだよ。つまり、えらい人は生まれるときからもう、えらくなって生まれてくるということなの。だから、あんたも、ねこやねずみどころか、えらい人になる生まれつきっていうわけなのよ。おこってはだめ。」

母はそういいましたが、それでも、わたしは、自分がねこやねずみにに似ているように思われ、どうもいい気持ちがしませんでした。

ところで、なんとわたしは、いま七十九になっております。この歯がはえていたときから七十九年もたちました。

それで思い出してみるのですが、どうやら、ねこにもねずみにもならないですんだようです。し

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

かし、まだわからんという人があるかもしれません。

お寺で、お坊さまの話を聞きますと、人間が死ぬると、あの世というところへいくのだそうです。そこで人間は、ねこに生まれたり、ねずみにかわったりすることがあるそうです。こまったことです。

でも、そんなことは、話ばかりで、見てきた人はないのですから、ほんとうのことはわかりません。まあまあ、この世で、ねこにもならず、ねずみにもならず、人間として七十九年も生きられたというのは、なんというしあわせなことだったでしょう。

そのしあわせの七十九年のうちでも、わたしがいちばんしあわせと思うのは、ということになると、やはり子どもの時代です。そしてわたしが、この七十九年間でいまでもいちばんよくおぼえているのは、その子どものときのことです。七つぐらいから十四、五まで、故郷の村でせみやふなをとってくらした七、八年のあいだの生活です。

では、それをこれから書いて、みなさんにもたのしく、幸福になっていただきたいと思います。

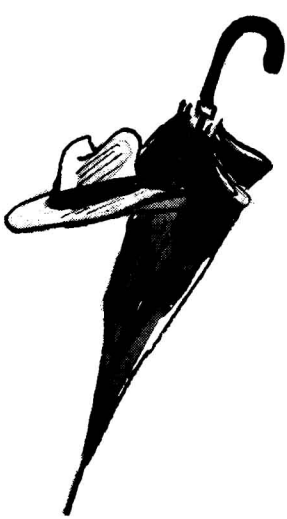
エヘンの橋

まず、村にかかっていた十七からの橋の話を聞いてください。

なにぶん、わたしの生まれて育った、あの岡山在の島田という村には、山が一つもなくて、見わたすかぎりが田んぼだったのです。

田んぼというものを、きみは知っていますか。春五月ごろから、そこには水を入れます。そして水がたっぷりはいったところで、いねを植えます。いねは、秋までそこに植わって育つのです。まず八月ごろには花がさき、九月には実がなります。十月には、その実をとって、十一月にお米にするのです。

その五月から十月まで、半年ほどのあいだ、いねは水草なんですから、田んぼに水を入れて、そ



こを池のようにしておかなければなりません。そうするのには、遠いところを流れている大川から水を引いてきて、その見わたすかぎり広がっている田んぼに水を入れなければなりません。

その見わたすかぎりの田んぼといっても、まるでごばんの目のように、小さい仕切りがたくさんあって、その数はきっと、何百というのだったと思われます。そこへ一つももれないように水を引くには、それこそたくさんの川が必要です。大きな川、中くらいな川、小さい川。

まず、村の大きさからいいましょう。そうですね、あれで、南北が二百メートルぐらいでしょうか。東西となると、三百メートル、そんな小さい村なんです。それなのに、川が、そうです、橋をかけなければわたれないような川が、南北に二つです。東のはしっこと西のはしっこです。ところが東西に流れている川となると、四つもあるのです。

まず東のほうから流れてくる大川というのがありました。それが村の北のはしを流れて一年じゅう、水をたっぷり運んでいました。そこから中くらいの川が南をさして流れ入り、それがなんと三本にわかれて、村の中を通っていました。

つまり村には大川といっしょに、四すじの川が東から西へ流れていたのです。そうなってくると、橋が必要です。

「一つ、二つ、三つ、四つ――。」

わたしはこの二、三日、頭の中に七十年前の村の姿を思いうかべて、その橋の数を数えてみました。すると、それが十七もあるではありませんか。

村に、それも家が二十軒ばかりしかない小さな村に、十七の橋があるなんて、そのとき、わたしにはどうも、すこし数えちがいがあるように思われてなりませんでした。それでなんども数えてみたのですが、ちがいはありませんでした。

そこでまず、わたしが生まれた家の東北のかどにある橋の話をいたしましょう。

それは横はばが二メートル、たての長さが三メートル。いや、もっと小さかったかもしれません。みかげ石でできています。わたしが生まれる前からそこにかかっていたのですから、百さい二百さい、あるいは、もっと年をとっているのかもしれません。

とにかく、そんなに小さい橋ですから、名まえはありません。名まえはないのですが、わたしはわたしひとりの頭の中で、それをエヘンの橋とよぶことにしております。それというのが、むかし母から聞いた話があります。

それにはまず、父がたいへんなかんしゃくもちだったことを申しあげなければなりません。とく

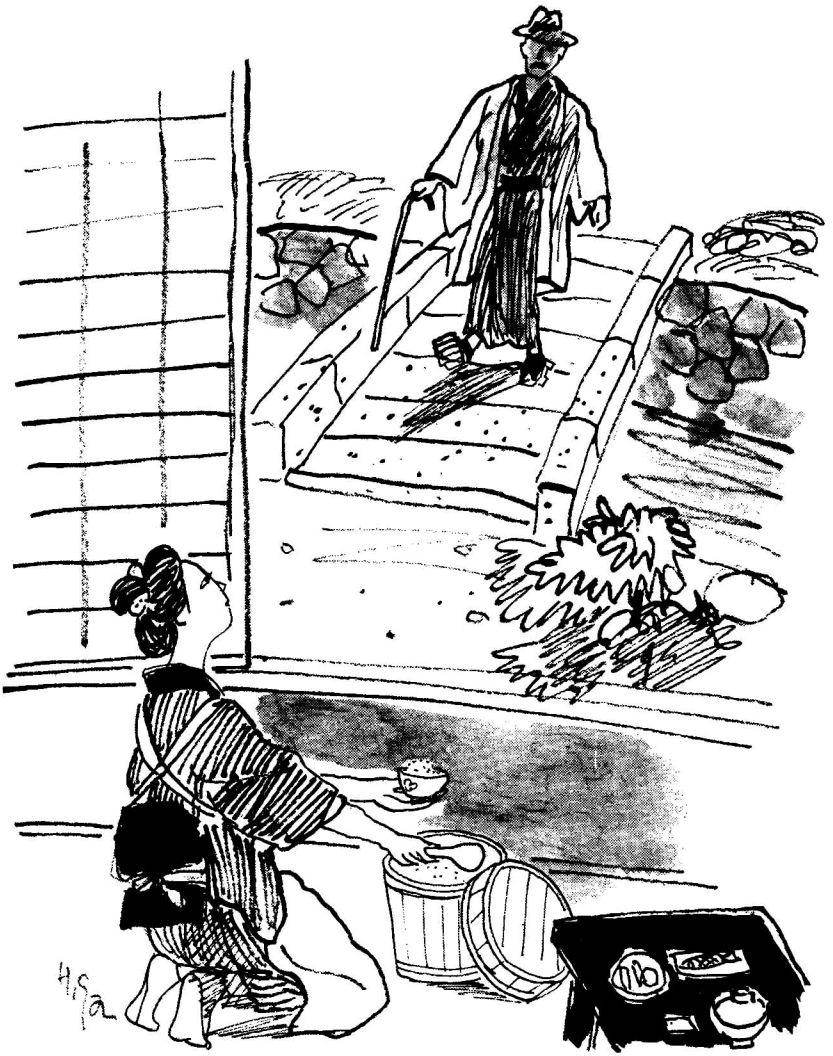
に、ごはんのときおぜんに向かうと、もうおこっておるのでした。

ごはんのときぐらいなごやかに笑顔をして、みんなをらくな気持ちにしたらよさそうなものと、母はよく思い思いしたそうです。とにかく、そうして食事時に腹をたてると、茶わんをそこらへ投げとばして、みじんにわったりするのでした。

もっとも、父は、わかいとき、御野郡（いまの御津郡）の三秀才といわれたほどの才能をもっていたそうです。一八五六年生まれの百姓の子でしたけれども、一八八〇年明治十三年には、二十四で石油ランプの心を作ることを始めました。そして村のかたすみに小さな工場を建てて、その製品を売りに、大阪や東京へよく出かけました。

ところで、そのお昼ごはんです。工場がいそがしいもので、なかなか、十二時に家へ帰れません。いまのように電話があれば、これから帰るなんて知らせるの、わけはないのですが、明治十年代です。そうはいきません。

母も食事の用意いちおうはしておくものの、おそくなれば、おつゆもさめます。あたたかいごはんもつめたいごはんになります。もうきょうは晩ごはんといっしょになるかと、昼の用意をしまいかけていると、父がいそいそ帰ってくることもたびたびで、そうでなくとも、気が立っているので



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com